

# 根深い価値観の分断、 多文化共存リスクは 超えられるか

在仏コラムニスト 安部 雅延



## 価値観の深刻な対立

ウクライナ紛争にしろ、イスラエル戦争にしろ、世界は深刻な分断の危機に晒されている。仮にヘリコプター事故で死亡したイランの故ライシ大統領の死がイスラエルの工作によるものとなれば、中東は第3次世界大戦を引き起こすきっかけになる可能性は高い。

パリ五輪・パラ大会を控えたフランスでは、アラブ系移民による麻薬密売、暴力事件が多発し、テロの脅威も迫っている。治安に対する不安が高まっている。過激なイスラム系住民の間では分離主義が拡散し、1つの国の中で異なる2つの価値観を持つ国民を分離する主張を繰り返している。

フランスで増え続けるアラブ系移民の態度の変化を肌で感じ、筆者はドメスティックな問題と最初は思っていたが、具体的には親和性の乏しい西洋文明を代表するフランスとイスラム教を基本に置くアラブ文明のせめぎあい。日に日に世界で対立を深め、フランス政府が進める同化政策とは真逆の分離主義が世界に広がっている。

世界中で同じような現象が起きていることに気付かされる。たとえば、イ

スラエル軍のガザ攻撃を非難するパレスチナ系学生組織が全世界で抗議運動を展開し、ハーバード大学では抗議デモに参加した学生を卒業させない措置がとられた。

大学や政府は、反ユダヤ主義を許さないという強硬姿勢をとる中、イスラエルのガザ侵攻に抗議する学生は、信教の自由や人道危機を主張し、大学への多額な寄付を行うユダヤ系企業から大学が金を受け取らないよう抗議し、溝は深まるばかりだ。

戦後、ホロコーストのユダヤ人大虐殺を引き合いに出し、反ユダヤ主義を持ち出せば、反対勢力を抑えられていたのが、今では世論がパレスチナに同情的で、イスラエル批判は広まる一方だ。これに対してイスラエルは、いかなる批判も押しつけ、過激派組織ハマス殲滅のため、ガザ攻撃をやめるつもりがないことを表明している。

イスラエルをあくまで支持するアメリカのバイデン政権だが、メキシコ国境からの不法移民に門戸を開いたために、アメリカのルールを守らない移民が急増し、大都市を中心に治安悪化が顕著になってきた。

中南米のギャングが暗躍し、麻薬密

売、手荒な強盗、路上での暴力の日常化は深刻というしかない。その多くに移民系住民が関わっている。彼らの多くは自国の伝統や価値観よりは、生きることが最優先で、犯罪にも簡単に手を出す。

国連教育科学文化機関(UNESCO)憲章に「戦争は人の心の中で生れるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない。相互の風習と生活を知らないことは、人類の歴史を通じて世界の諸人民の間に疑惑と不信をおこした共通の原因である」とある。

一方、冷戦終結後の21世紀は、その反省もむなしく民族間や宗教間の地域紛争を引き起こし、国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)の発表によると、2024年5月時点で、紛争や迫害などで住む場所を追われた難民や国内避難民は1億1400万人、経済移民の数を入れば、2億8100万人と世界人口の3.6%に達する。

つまり、彼らは行き先の国や地域の文化を熟知するまでもなく、異文化の中で生活し、その国の労働力になり、国や社会を構成している。彼らは時として社会から疎外され、文化摩擦を起

こし、犯罪の温床ともなっている。

## 異文化が引き起こすリスク

大リーグの大谷翔平選手の通訳だった水原容疑者は、ギャンブル依存症で一生返済不可能な額を大谷氏の口座から不当に盗み出し、資金調達の変態行為で銀行からも訴えられている。彼もまた、親の事情でアメリカに引越し、アメリカで育った結果、基本的なモラルが抜け落ちてしまったわけだが、特殊な例とは言えない。

例えば、アメリカに憧れて移住した知人の日本人夫婦が「アメリカでは何でも自己責任だから、絶対に過保護にしない」と親が決めて子育てした結果、その子は青年になって体中にタトゥー

を入れ、耳には5個以上のリングを入れて、犯罪グループに入り、何度も逮捕され、今でも刑務所にいる例がある。

はつきりしておかなければならないのは、その人にとって異文化の環境は、人間を良くする場合も、悪くする場合もあるということだ。日本人の場合には公衆道徳は集団や環境（人の目）が育てるものなので、その環境がないと宗教がない限り、人間を悪くする可能性もありうる。それも親次第だ。

両親が両方外国人の場合は、彼らの異文化理解が不足している場合、固定観念だけで、その背景も深くわからず、子育てに失敗する例が多い。上記に書いたアメリカに移住した日本人夫婦のように、自己責任だけが突出し、しつ

理解する必要があり、アメリカ人の親たちも自立を促すために完全に子どもを放置しているわけではない。

フランスで筆者の子どもが高校に通っている時、国際機関に勤める日本人家庭の子や料理人の子がいた。彼らはすでに何度か落第しており、悪いことに手を染めている場合もあった。つまり、どんなに海外に長くいても、宗教でもない限り、その国の人間にもなれず、さりとて道徳的に正しい日本人にもなれないリスクがある。

世界の不幸によって生まれた難民、移民も、移り住んだ先で問題を引き起こすケースは多くある。クリント・イーストウッド監督主演映画「グラン・トリノ」は、自分の国の伝統を守る中国少数民族の移民の少年と、完全に育児放棄し不良グループを形成している同じ民族移民の少年らの暴力事件を扱った作品だった。

日本でも昔から、中国や韓国、今ではベトナム人などの犯罪者が多いのは、日本社会から孤立し、さりとて出身国の伝統的価値観も継承していない者たちが犯罪に手を染めるケースが多い。

それに移民・難民を取り巻く環境も

変化している。本来、社会のマイジナルな存在である移民・難民の滞在が長期化し、その国が多様性を推進する中、地味に努力するよりも、ルールを無視した違法行為が目立つようになったことだ。

さらに企業駐在員や外国人観光客まで、問題を起こしている。ニューヨークに駐在していた日系大手ハイテク企業の男性の妻がコカイン中毒になった事例、ギャンブルに手を染めて多額の借金を作った駐在員もいる。

アメリカの大学を出て一流の外資系コンサルに就職した新人の研修を行った際、「自分はなぜ、日本人としての自信とかアイデンティティを持つ必要があるのか」と聞かれた。アメリカでアイデンティティクライシスに陥った症状だ。

国際性を持ったグローバル人材の必要性が叫ばれて長いわけだが、実は本人の中しつかりした日本人としての価値観や自律心がなければ、バイリンガルでも危険な存在だ。駐在員でアメリカに行つて麻薬中毒になった駐在員妻の例もある。異文化は時として人間を不幸に追いやるリスクがある。



多くのアメリカ人は、自由主義の代償を心得ており、子供が不良にならないための様々な対策を講じている。つまり、異文化を理解するには、様々な要素を